
羽毛の原

ラーさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

羽毛の原

【Nコード】

N88830

【作者名】

ラーさん

【あらすじ】

旅路の果てにたどり着いたのは、白い羽毛の大地だった。

旅路の果てにたどり着いたのは、白い羽毛の大地だった。

足を包む羽毛があたたかい。

ゆるりと風が動く、白い羽毛がさざと波打ち、羽根が数本ふわりと飛ぶと、乳白色の空に滲んでいった。

甘い香りが残る。

「どうだい、旅の人？」

「美しい光景ですね」

「そうだね。けれど魅せられてはいけないよ。還れなくなるからね」
私の後ろに立つ案内人の若い男は、うなずきながらも私の感動に釘を刺した。

「ここは美しくてあたたかい場所だけれど、とても寂しいところだからね。誘われて戻ってこない人も多いんだ」

若者の言葉を聞きながら、私は二歩三歩と前に進む。

羽毛は柔らかく足裏に沈む。

その下に伝わる感触は砂か。

しゃがんで羽根の下を探ると白い砂が触れた。

すくった砂は細かく、手の平からなめらかにこぼれ、さらさらとさみだれ落ちる。

「ここはどうしてできたのですか？」

「しばらく待てばわかりますよ」

若者は小さく笑って、乳白色の空を見やった。言われた通りしばらく待っていると空の一角を若者が指差した。

「ほら」

空に一点。

「鳥だ」

乳白の空にぽつりと一羽、白い鳥が浮かんだ。

「こちらに来る」

白い鳥はだんだんと大きくなって、やがて見上げる空へ飛んでくると、私の上をぐるりと回り、ゆっくり空を低くして、ついにさわりと白い羽毛に舞い降りた。

「行ってみましょう」

若者に促され、私は鳥の降りた場所へむかう。

「もう眠りましたね」

長い首を折りたたみ、自らの羽根をまくらにして、羽毛の草はらのあたたかさに、目閉じて丸まる白い鳥は、すやすやと寝息をもらしている。

「このまま眠り続けるのです」

「このまま？」

「はい。羽毛と骨に変わるまで」

若者の微笑に私は腰を屈め、この白い鳥の眠りに触れた。血潮の流れがぬくもりとなって手に伝わる。

「まだ生きているのに」

「やがて死にます。そして白い羽毛と骨の砂の原になるのです。この大地はこうして何千年もかけてできたのです」

私は生きている羽毛をなでた。寝息はゆっくりと上下して、すこやかに背中をゆらしている。

「どんな夢を見ているのだろうか」

「よい夢なのでしょう。二度と目覚めない夢なのですから」

それはきつと美しい夢だ。この白い羽毛の大地のように。私は美しい夢に眠る鳥をうらやんだ。

「さあ、そろそろ戻りましょう」

この土地に惹かれる私の心を見透かすように、若者は声をかけた。

「これ以上ここにいと、誘われますよ」

立ち上がる私に若者はうなずく。

「ここはあたたかいけれど寒い。長居すると身震いを起こします。仕事とはいえ私がここに来ることを、妻もあまり快く思っていないようです」

私は若者の顔をまじまじと見た。その細工には幼ない丸みが赤みを帯びて残っている。

「奥さんがいるのですか」

「もうすぐ子供も生まれます。あまり心配はかけられません」

微笑む若者はちらりと顔を横にむける。赤さす頬が横顔の影に消えた。私は祝辞を述べる。

「それは喜ばしい。私は独り身なもので、想像もできないけれど」

「くすぐったい感じです」

若者ははにかんでかりかりと少し頭をかいた。それはあたたかい仕草だったけれども、私には遠いあたたかさと思えた。

羽毛が足をぬくもりにとらえる。

これは私が旅人だからだろうか？

旅の目的も、帰る場所も忘れた旅人の漂流を、この白い羽毛が柔らかくつかむ。

それは近く、あたたかい

「さあ、戻りましょう」

若者は語気を強めて再び言った。

「そうですね」

私は眠る鳥から羽根を一本、土産と思って失敬すると、若者の背中を追って歩いていった。

一度だけ振り返る。

鳥は羽毛に囲まれて、優しく白く眠っている。

手にする羽根を鼻先に回す。

甘い香りが残った。

ここはどこだろう？

黒く透き通った海の中を私は泳いでいる。

黒い海は呼吸^{いき}する口に甘く香る。

いつからこうしているのだろうか？

私の横を泳ぐのは大きな大きな白い鯨。

彼は私を横に見ながら、深く黒にもぐっていく。

そのシワ寄るまぶたに囲まれた、円い瞳に映る私の顔は、わずかに唇をほころばせ、満ち足りた表情を浮かべていた。

私は黒に沈んでいく。

上を見れば、水面^{みなも}の揺らぎに白い羽毛が生い茂り、白い砂が星のようにきらめいている。

私は誘われてしまったのか。

薄れた記憶をたどり返す。

案内人の若者と別れてから、私は再び羽毛の地を訪れた。そしてその柔毛に横たわって、私はあの鳥のように眠ったのだ。

あれからどれほどが経ったのだろうか。

けれど怖れはなにもない。

白い馬が背後から駆けた。

これが鳥の見る夢か。

馬は鯨に並び走ると、その首をひと触れさせて、いなきにたてがみを乱しながら、私を追い越し黒の淵へと馳せていく。

鯨がゆらりと尾びれを打って、馬を追うように身をくねらすと、上から白い魚の群れが降り過ぎた。

一枚一枚の鱗をちりばめ、白く残る魚群の軌跡は、まるで夜空に走るほうき星のよう。

散った鱗に手を伸ばすと、遮るように白いキリンの首が現れて、長いまつげに鱗をさらって去っていく。

追いかける私のまわりはいつの間にかに、白い豚の群れに囲まれて、一頭の豚が私の股に滑り込むと、私を乗せて黒の底へと連れていく。

豚の泳ぎはゆっくりと、けれどしっかもぐっていく。

これはいつか見た夢か。

ざざつと葉虫の白い雲がうねりをなして泳いでいく。

これはいつか見る夢か。

ふわりと長尾羽根をひるがえしたのは極彩色の白い鳥。

みんな黒の底を指ししながら思い思いに泳いでいる。

私には懐かしさがあり、安息があり、よろこびがあり、時間を失った夢の世界の、たゆたいに想うのは、やすらぎに抱かれた、旅路の終わりの果ての夢。

みんな同じ場所を目指している。

前を泳ぐのは白い女の子。

豚のおしりをぼんとたたいて、私はその子のとなりへ進む。

並んだ女の子がこつちをむいた。

かつてどこかにかいま見た、憧憬にたたずむあの少女。

私にこりと微笑みかけると、彼女もにこりと微笑んで、私がそ

っと手を差し出すと、彼女はぎゅっと握り返した。

引いた手はやわらかく、豚の背にふわりと座る。

豚はいよいよ深くもぐる。

やがて黒は円くなり、深い深い穴となる。

くぐる。

そこに見たのは白い骨。

くぐる。

駆ける馬骨に泳ぐ鯨骨。

くぐる。

鱗の削げた魚の骨群。

くぐる。

白肉の残片を、垂らすキリンの首の骨。

くぐる。

豚も気付けば骨になり、かたちを失えばらに、散骨していき
気泡にとけた。

とける。

馬も鯨も魚もキリンも、みんな気泡に白くなる。
とける。

私の手は骨。

とける。

つないだ彼女の手は硬い。

とける。

私が見つめた彼女の顔は、白骨に微笑んだ。

あわ。

私の骨と彼女の骨がまじりあう。

あわ。

白い気泡が黒い海を抜けていく。

とける。

あわ。

夢の中に夢を見た。

ひかり。

赤子の泣き声がした。

「あの旅人も誘われてしまったみたいだよ」

寝台に赤子をあやす妻の手は、夫の言葉にはたと止まる。

「一人であそこにむかうのを見た人がいたそうだ」

「ねえ、あなた。やっぱりあそこにはもう行かないで欲しいわ」

若い妻は不安げに、若い夫の目をのぞく。

「そういうわけにはいかないよ。きみとこの子を養わなければなら
ないんだから」

夫は笑い、妻と赤子に目を配る。

「それにたくさんのお金を払っても、あそこに行きたがる人は多い
のだし」

「でも」

言いつのる妻の横に夫は座り、その髪を優しくなでる。

「大丈夫だよ。ぼくは大丈夫だ。大丈夫。だってぼくにはきみがい
るし、これからはこの子もいるんだから。絶対に惹かれやしないさ」
泣き止まぬ、赤子のほっぺを軽くつついた夫の胸に、妻の身体は
少しかしいで、その固さになじむように、寄せた頬へぬくもりが伝
う。

あたたかい。

「さあさ、はやくこの子に名前をつけてあげないと。どんな名前が
いいと思う？」

夫の問いかけに妻は腕のわが子をゆらし、その小さいおでこに口
づける。

赤子の泣き声。

生まれたばかりの泣き声は、どこまでも強く生きている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8883o/>

羽毛の原

2010年11月27日21時55分発行